

日本語上級学習者の  
ピア・リーディング談話の多角的分析  
—発話機能と司会役の役割を中心に—

要旨

2018年2月  
一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程

胡 方方

LD142001

## 要旨

日本語教育の授業では、対話をベースにしたピア・ラーニングが増える一方で、教師の間では授業に手応えが感じられないという声が聞かれる（石黒2016）。どうすればピア・ラーニング授業をよりうまく進められるのだろうか。そこでは、授業準備段階の文章選定、課題設定、グループ編成、及び授業進行段階のアイス・ブレイキング、教師の介入、フィードバックなど、さまざまな要因が授業の成立に影響をもたらしているが、もっとも重要なのは、話し合いに主体的に取り組む学習者の振る舞いであろう。グループ・ディスカッションで、学習者はどのように話し合いを進め、どのように課題を完成させるのか、ピアでの話し合いを通じて互いにどのように成長するのか、メンバーはそれぞれどのような役割を果たしているのかなどが、グループにメンバーとして参加していない教師の目から把握しにくい構図になっているため、教師が学習者を適切に支援できないことがある。そこで、学習者同士の話し合いの実態を解明することが重要になる。

本研究では、上級学習者による課題達成型ピア・リーディングにおいて、教師の目から言えば死角になるグループ・ディスカッションを可視化することにより、教師の示唆となる資料を提供し、教師がピア・リーディングの授業設計の改善や、参加する学習者への支援や助言を行う際の材料を示すことを目的とする。そのため、本研究の研究課題を、「課題達成型ピア・リーディングにおいて、どのように合意が形成され、その中で参加者がどのような役割を演じているかを、グループ・ディスカッションの質的な分析を通して明らかにする」ことに設定した。

グループ・ディスカッションを分析する際には、どのような機能を帯びた発話がなされ、それがどのようなまとまりをなし、どのように展開して合意に至るかという、談話を構造から分析する側面と、その談話の構造を参加者がどのように協力して作り上げていくかという、談話を参加者から分析する側面の二つがあり、本研究はこの両面から分析を行う。以下、各章の概要を紹介していく。

第1章「はじめに」では、本研究の背景と研究目的を紹介し、その前提となる協働学習及びピア・リーディングの先行研究を概観した。具体的には、協働学習の有効性と問題点及び評価、ピア・リーディングの種類、分析対象についての先行研究を紹介し、本研究で対象としたアカデミック・スキルの育成を目指す課題達成型のピア・リーディングの特徴を説明した。

第2章「本研究の考え方」では、ピア・リーディング授業において、グループ・ディスカッションに参加しない教師は、実態を把握しにくいいため指導が難しいという問題点に触れ、本研究のオリジナリティを述べ、本研究で明らかにしようとする4つのリサーチ・クエスチョンを挙げた。本研究の目的を達成するには、談話を構造から分析する側面と、参加者から分析する側面という2つの側面を支える先行研究を紹介した。

第3章「本研究の分析対象」では、本研究の分析対象を紹介した。調査対象となる読解授業は、学術的な読解力養成を目的としており、多国籍の上級日本語学習者22名が受講したものである。授業で使われるテキストは授業担当者が書いた市販の社会言語学入門書であり、毎回2～3ページ抜粋し、読解目的により、異なる課題をまず個人で、そしてグループで遂行させた。研究対象としたのは、学習者がグループでディスカッションしている音声データを取り、文字化したものである。必要に応じ、学習者への事後インタビュー、課題シート、コメントシートも参考にした。

第4章「学習者はどのように合意を形成するのか」では、1回の授業に注目し、文字化データに発話機能ラベルを貼り付け、発話機能の視点から学習者同士のグループ・ディスカッションの実態を解明し、各グループの解答の決め方、合意までのプロセスを分析した。その結果、課題達成型ピア・リーディング授業のグループ・ディスカッションでは、学習者は①「進行表明」段階→②「解答提示」段階→③「解答議論」段階→④「解答整理」段階→⑤「合意形成」段階の一部を用いるか、その中の一部を2回、3回繰り返して議論を展開させ、合意形成を行うことが分かった。

第5章「多肢選択的な課題によるパフォーマンス」と第6章「自由記述式の課題によるパフォーマンス」では、異なる課題形式が出された2回の授業のグループ・ディスカッションを比較することにより、多肢選択的な課題と自由記述式の課題がそれぞれ学習者の話し合いにどのような影響をもたらすのかを検討した。その結果、多肢選択的な課題は議論の焦点は定まりやすいが、議論が深まりにくい面がある一方、自由記述式の課題は深く議論できる可能性はあるが、議論の焦点が定まりにくいきらいがあるという点で一長一短であることが分かった。また、多肢選択式の課題の回では、「整理」、「否定」の発話機能の使用が建設的な議論の形成に有効であるのに対し、自由記述式の課題の回では、「要求」の発話機能の使用が意見交換のために有益であることが談話例から観察された。

第7章「ディスカッションの沈滞」では、全11回の授業談話に注目し、観察されたグループ・ディスカッションの沈滞の実態を、談話例を示しながら明らかにした。具体的には、

- (1) 参加者の発話数が偏りやすく、発話の調整がうまくいかない
- (2) 話し合いが短すぎたり、沈黙が多かったりし、議論の展開がうまくいかない
- (3) 時間内に話し合いがまとまらず、冗長になり、観点の整理がうまくいかない

という、3つの場合に分けて分析した。また、こうした現象が起こる背景には、発話調整役、議論展開役、観点整理役といった役割を果たす司会役の不在があることを示した。

第8章「司会役の功罪」では、第7章で観察されたディスカッションの沈滞を改善できる存在であるグループの中の司会役が、話し合いにどのような役割を果たしているかを観察した。その結果、司会役が登場し、適切な役割を果たせば、議論が建設的に進むようになる一方、司会役が役割を適切に果たせず、「強い司会役」や「弱い司会役」になってしまう場合には、議論の進行に支障を来すおそれも明らかになった。

具体的には、司会役が登場すると、

- (1) 発話調整役として話し合いの進行を適切に管理し、公平な発言機会を与えられる。
- (2) 議論展開役として発言できない参加者をサポートしたり、論点を焦点化して検討させたりすることで、読みを広げたり深めることにつながる。
- (3) 観点整理役として議論が混乱している場合に観点を整理し、議論の方向性を決められる。

という3点が観察され、ディスカッションの建設的な環境が整う。

しかし、「強い司会役」が存在すると、

- (4) 司会役の一方的な意見表明になりやすく、公平な意見交換が保証できない。
- (5) 司会役が議論に対して支配的になり、強引な議論運営が目立つ。

といった弊害が生じるおそれがある一方、「弱い司会役」が存在すると、

- (6) 司会役自身の意見表明が控えられ、一参加者の貴重な意見が失われる
- (7) 意見の提示が単なる答え合わせになり、参加者間のやりとりの機会が奪われる

といった弊害が生じるおそれがある。

第9章「準司会役の出現による司会役がもたらす弊害の改善」では、第8章で明らかになった司会役が十分に機能しない場合に及ぼす弊害を取り除くための解決方略を探っ

た。その結果、キーとなるのは、元の司会役に代わって一時的に司会役を務める準司会役の登場であることが分かった。

グループ・ディスカッションに準司会役が登場すると、

- (1) 「強い司会役」による一方的な意見表明に対し、ほかの参加者の参加を促す。
- (2) 「強い司会役」が強引に決めた議論に一石を投じ、議論の流れを変える。
- (3) 「弱い司会役」が一参加者として自己の意見を主張できる環境を整える。
- (4) 「弱い司会役」による単調な話し合いに刺激を与え、変化をもたらす。

といった働きが生まれ、ディスカッションのための建設的な条件が整う。しかし、準司会役の出現は特定の参加者に期待するのではなく、司会役以外のメンバー全員の努力によるほかない。一人の司会役の限界を防ぐために、「全員が司会役になれるような土壌づくり」が大切であることも併せて主張した。

第 10 章では、第 4 章から第 9 章の分析の結果をまとめ、ピア・リーディング授業を考える現場の教師にグループ・ディスカッションの指導法を提言した。たとえば、発話機能に関しては、議論が複雑になったときに解答や意見、文脈を「整理」したり、少数派対多数派の状況になったとしても、うまく「否定」することにより、解答の新しい可能性を話し合いに持ってきたり、意見や根拠を「要求」することにより、議論を展開させるなどのストラテジーを伝えることを提案した。司会役に関しては、学習者に司会役の役割と弊害を理解させることで、学習者が自ら積極的に動くことが期待でき、参加者全員で協働学習を作り上げていくことにもつながることを示した。

第 11 章では、本研究の意義と今後の課題を示した。これまではピア・ラーニングのプロダクトに注目した研究が多かったが、ピア・ラーニング、特にピア・リーディング活動を実際に行う際に、教師がもっとも把握しにくいグループ・ディスカッションの実態を解明し、発話機能と司会役という 2 つの観点からの分析を踏まえ、ピア・リーディングにおけるグループ・ディスカッションの指導法を教師に提案したところに本研究の意義がある。

一方、今後の課題として以下の 4 つを掲げた。

- (1) 本研究の分析以外の条件におけるピア・リーディング授業への応用。
- (2) 発話機能の分析に基づく、より活発に議論を進めるための文型リストの作成。
- (3) 司会役の分析に基づく、司会役の各役割を果たす際のストラテジーの解明。
- (4) 学習者による活発な意見交換を目指した教師の介入の工夫。

